第２回　「近頃の風潮と防災」

IT 生

どうにも困ったことである。大阪都構想で「反対」がうわまったが、それについて、賛成派は「現状維持を望んだ」と、ともすれば「改革を望まぬ怠惰な人々」といわんばかりに非難する。大いなる勘違いである。

景気の浮揚策は、なにも直接、景気を刺激するばかりが能ではない。生活の安心安全が担保されるから、消費をする心の余裕が生まれることもある。むしろそのことが社会の基盤になって、景気を刺激するさまざまな試みがあってしかるべきなのである。そこには「勝ち組」「負け組」は存在しない。人々のネットワーク（地域性）豊かな社会が存在するのみである。

日本はもともとそうした社会であったはずで、それゆえに文化豊かな、教養高い民族となった。そうした日頃の文化、生活を重んじる日本人（なにわ人）が、都構想（そもそも住民投票にいたるほど構想が熟してなかった）に反対したとみるべきであろう。

そうした社会が、防災に有効だと、寺田師はいう。

何度も津波にあらわれながら、人々の生活はつづく岩手県釜石市の海岸

ひるがえって、寺田師は、防災が進まない現代社会について以下のように述べる。

−当局は目前の政務に追われ、国民はその日の生活にせわしくて、（地震学者や気象学者が予想する国難への）忠言に耳をかす暇がない。（中略）　低気圧という意味の言葉の意味すらよく呑み込めてない人が立派な教養を受けたはずのいわゆる知識階級にも存外多いのに驚かされる。（中略）　私の知人の実業家で年中忙しい人がある。ある時、私は眼前の若葉の美しさについての話をしたら、その人は、なるほど今は若葉時かと云ってはじめて気がついたように庭上を見渡した−

寺田師は、こういう日本人を「新日本人」と呼ぶ。そして、「この新しい日本人が新しい自然に順応するまでには、多くの失敗と過誤の苦い経験を積まねばなるまいと思われる」と警告する。この記述は、昭和１０年のものだが、寺田師のいう「失敗と過誤」は、それから８０年たってもまだ続いているということになる。

（平成 27 年 5 月）